

梅雨の季節ですがオレは相変わらず安威川に通っています。朝、天気予報を見て「今日はこの時間に行こう」と決めている。考えてみれば寒い頃はほとんど雨が降らず昼飯を食い終わったら何も考えずに安威川に出かけていた。毎日昼飯が終わったら、スポーツ用の上下に着替え、その上から防寒具を着る、冬とは言えコップ一杯分ぐらいのスポーツドリンクをボトルに詰め、またまた冬とは言え汗をかくのでタオルをそしてボトルをポケットに入れ、何も考えずに自転車に乗った、時間の事、雨のことなど考えなかった。天気予報を見て安威川に行く時間の予定を考えると梅雨なのだとは再認識するとは大袈裟ですがこれが梅雨ですね。余談ですが梅雨のこの時期、梅雨以外でも雨の降る日は、何日かに一度はアトリエに洗濯物が棚引いております、2階に在るアトリエは空気が乾燥しているので洗濯物は乾くようです、これも生活ですので仕方ありませんね。

安威川は半日ぐらい強い雨が降ると、上流の山々に降った雨が崖を流れ落ちて小川に流れ、普段は水が在るか無いかの小川も、ごうごうと土石流なみの水量と石ころ、そんな小川がいくつも集まってだんだん川は太く早く水を流し、安威川の本流は泥混じりに黄濁して水嵩が増えてくる。以前河川敷を通っている時、横を轟々と流れる水がチロリチロリと河川敷に溢れだし、「これはちょっとヤバいかな、危ないぞ」と思う間に靴が水に浸かり、河川敷の歩道に水が流れ出したので、慌てて駆け上がって土手の上に登った。山の中でのほんま物の土石流なら一瞬に襲ってくるのだろうね。上流から流れてくる枯れ草に枯れ枝が河川敷の手すりの棒杭に絡まりゴミとなって置いていかれる。雨がやんで何時間が経って、こちらからも山の姿が見えだすと、「山の雨も上がった」とわかる、山の雨が上がって2.3時間が経つと水嵩は嘘のように引いている。棒杭に絡まった枯れ草枯れ枝が空中にあるので、こちら辺りまで水位が上がったのだなとわかる、まだまだ黄濁した早い流れは残っているが、河川敷の歩道は普通に歩ける。

年配の友人が「カワウソ 滅びた というけれど オレ 見たぞ」「カワウソは 滅びていない 生息 している、すごいじゃないか」と一杯飲みながら興奮気味にのたまう。「いやいや あれは カワウソじゃなくて ニートリア」「外来種で 日本に居ついた 戦争中 毛皮を取るために 輸入して 飼っていたやつが 逃げ出し 最近全国的に 繁殖したらしいですよ」「・・・はあ そう」

ニートリア：南アメリカ原産・特定外来生物。上質な毛皮が安価に得られるため、第二次大戦時、軍隊の防寒具用に世界的に飼育された。ニホンカワウソは絶滅宣言が出されたけれど、どこかで誰かが見たという情報も出回っている。ニートリアと同じように、良質な毛皮を得るための乱獲、農薬、河川の水質悪化が滅びた原因。ニホンオオカミもニホンカワウソも絶滅していないよ、定点カメラに写っていたよ、なんてニュースがあればそれはすごいんだけど。ニートリアにしろアカカミミガメにしろブラックバスにしろ、学者先生が彼らの抹殺に、拳を上げて奔走しておられるが「何 外来種」「おいらの どこが 悪いんだ」「人間の ほうが ずっと 悪だ」「なんのことだか おいらは 生きて行くぞ」と彼らから大いにクレームが来そうな話「オレたちこそ 被害者だ」といわれそう。

最近、科学の本を読んでいて面白い。時間と空間が違うだけで、人間が活着している事と似ている、オレが活着している事と同じではないかと思つて嬉しくなる。「今も宇宙はどンドン広がつていて、あと 00 億年後には もっともっと膨張している」「オレは数年後には星になっている、小さくなつている」「光は太陽から地球まで 8 分かかかる、月からだと 2 秒の速さ。00 光年とはどれぐらい向こうかな、そんな明かりが見えている、あの星だ」「物質と反物質がぶつかる」「オレと反オレが居る、居るよな、反お前も居るよな」「身体も地球も突き抜ける粒子があるという」そんな途轍もなく大きいもの、そんな目にも見えない小さいもの、そんな途轍もなく長い話、そんな途轍もなく一瞬の話、そんな話を聞いていると人間の存在なんて何でもないやと考える、ましてオレの存在なんて屁のようなもの何でもないやと考える。そんな世界なのだから、そんな中にいるのだから、人間は人間らしく規則も徳も情も交えてしっかり生きなければ、という人もいれば、反対に、オレのように、「だから何がなんでも人間の存在なんて小さい空しい、だからこそ、オレはオレなりに、オレの人生を生きるぞ」と思っている。

夏がやってきた、暑さの夏が。昔、真夏の北海道をウロウロしていた時、牛の世話をしていたおじさんに「大阪は暑いですよ、立っているだけで汗がだらだら出てきます、立っているだけですよ」「へええ・・・」と説明をしたが、昨日から雨が終わってその暑さがやってきた。入江写真館を見たいと娘Ⅱが言うので家族3人で車に乗り込んだ。「昔、車にクーラーのない時代は暑かったね、窓を全開してもじりじり、車のクーラーはいいねえ」と、生駒越えの路。

小林照之<取材ノート>の中に田中一村の話が載っている。まず小林の話から。嘗て小林照之著<毒蛇>を読んだ、ハブの話、ハブの血清の話、医療の話を読んで、よく調べている人だ情熱を注いでいる人だと気に入った。気に入ったとは生意気ない方かもしれませんが20歳以上もオレの方が年上なんだからお許し願いたい。詳しい内容は忘れたが、今でこそハブにかまれたら病院に急行して血清の注射をしたら命が助かるようになったらしいが、その昔は普通の薬しかなか次に祈禱師が出てくるやうで命を失う人、再起ができなくなる人もたくさんいたらしい。小林はハブの取材、咬症調査(原文より)で度々奄美に通っていたらしい、その何回目かの時、民俗資料館で「クワズイモとソテツ」「アダンの木」その他数点の作品が飾られ、田中一村の生い立ちが紹介されていたそう。まだまだ認められず、島に住み付き、紬の職人をしながら絵を描いていた爺さんが亡くなったので、絵をどこかで飾ってやろうという事から場違いな資料館での展覧会となったらしい。それを見て小林は“世に埋もれた一人の絵描きの絵”として観たそう。オレは今まで鹿児島より南には行ったことが無い、映像画像でよく見るがあの自然に接してみたい、島々の人が行かない所についてみたいと思っている、と話ははずれたが。小林がその次に奄美の島に来て集落の聖地の森から海を眺めながらその景色から「クワズイモとソテツ」の絵を想起したそうでその後“田中一村”の資料を集めく神を描いた男・田中一村>を著わした。関東から一村がやってきた1958年頃の奄美は本土復帰から5年「健やかに生きることが困難な離島の僻地、文化果つる島」と形容されている処に永住を決意した一村を小林はこう見ている。“ノロ”世襲制で継がれていく女性だけの神職“ユタ”神の霊に触れ、神の心境を語り、宣託、祈禱、運勢判断、病気治癒をする人の存在を無視できないという。ユタの一人が語ったという「神様には目に見える神様と目に見えない神様と二つがある。太陽、月、山は姿が見える神様、水や風は目に見えない神様です。コップや木が揺れ媒体を通じて見えても、実際に本質は見えません。言葉も目に見えません。島口は神の言葉で、島唄は神の唄なのです」小林は続ける。神に導かれて奄美にやってきた一村は、自然という神を描き、奄美の自然に抱かれて没した。

入江写真館に入った。入館料500円。奈良市入江写真館という名だけれど民間のものだそう。入江という人の写真は昔から新聞雑誌で紹介されていたので知っていた。1900年頃の生まれだからオレのオヤジよりもう少し上ぐらいかな、今ならデジタルカメラがあり誰でも彼でも少々の写真なら簡単に撮れる時代だけれど、入江の時代はデッカイ大型カメラを担いで朝に夕に現場で粘り、シャッターチャンスの待っている姿が我が友人の中西プロと重なって、雨の中日照りの中、雪の中風の中でうずくまって、空を見上げ下を見てタバコをくゆらせ時を過ごす様子が目に浮かんでくる。入江の写真は題材が奈良という事もあって、神を感じる風景、神が舞い降りて来そうな空気を感じる。

神とか神懸かりとかの感覚も知覚もオレは意識をした事があまりに少なかったけれども、人の生命の根源、生きていく事死んでいく事、そして日々の事の中にその人間が持っている神とか霊とかの塊があって、無意識にそれらの事は無視しているが、何かの折にオレに教えたり何かの折にオレを叱ったりという何かがあるのかもしれない。小林照幸を読んで、奈良の写真を見てしみじみと思った。

写真館の隣が新薬師寺「なんで2回も娘をひとりづつ此処に連れてこないと・・・」と笑うように何日か前に娘Ⅰを連れて来てオレの大好きな十二神将を見た。「入江もいいけど、この十二神将は最高だから見てみれば」と娘Ⅱは一人が入っていった。出てきた娘の返事は「むむ・・・いいけど」だった。なら街に入って飯を食って帰った。オレの知っている頃から見ればなら街は変わってしまっただけで“土産物の街”じゃねえか、この辺りは、である。

久しぶりに油画を描いている、“画”か“絵”なのか正解は知らないが昔は“油画”と書いていたようだが最近オレなりに絵全てに対して“絵”という漢字を使いだし統一している。今回の“油画”はオレも若い頃からのこの漢字を使ってきたので今日はこの漢字で書きます。いやあこんなに汚れるものか改めて驚いている、というのもどういふ事かと申しますと、まず手にべたべた絵の具が付き、そんな手でいろんなものに触（さわ）ればたちまちいろんなものが汚れてしまう、壁も椅子もドアノブもコップも服もなにもかもチラリと色が付くベタツキが付くので、油絵具で手がベタベタになればその都度石鹸と水で洗っている、執拗に洗っているけれど爪の間や指の指紋の隙間にまで赤や黄や青が染みついている、ベタベタさえ取れば何を触っても絵の具は付かないけれど、洗っても洗っても手は薄汚れている。描いている最中はウエス(waste 油や汚れを拭く布)で絵の具を拭き、画面を拭き、パレットを拭く。油画を始めると他の絵は同時進行できないので、というより油に限らず水彩でも版画でもFigureでも一つの事を始めるともう一つの事に手が出ない二つ平行にというわけにはいかない、というわけで今はもっぱら油画を楽しんでいる、一回で描きあげるぞと数枚が仕上がったものの中にお気に入り一つ、なかなかみなみなお気に入りという訳にはうまくいきません。昔は油画ばかりを描いていたけれど描いても描いても上手く出来あがらない、どうにもならない時が続いた、そんな若い日の事が思い浮かんでくる。絵の具は透明水彩、水彩、アクリルと幾種類も使うがそれぞれメーカーによっても硬さが違う、色が違う、発色が違う、風合いが違う、深みが違う。黄色はA社製、青色はB社製と使い分けている人もいるが、オレはそこまでこだわらない。久しぶりの油絵具をパレットの上でパレットナイフで混ぜるといい色が、渋くてしかも鮮やかないい色が出る。いつも絵の具を混ぜないでチューブから出したものをそのまま塗り、その絵の具が乾いてから次の絵の具を塗るようにしている、その方が色が鮮やかになる、パレットの上で混色するよりキャンバスの上で乾いた上から塗り重ねる方が絵の具が鮮やかだと思っているが、油絵具に限れば混色もいいのではとふと思ったが、これは又すぐ変わるかな。いずれにしろどっしり落ち着いた油絵具のキャンバスへの乗り、輝き、渋さは捨てがたい味だと嬉しくなる。サインを入れる際、oilのoを追加してTAKAoとした。

フェルメールの絵にブルーの絵の具がたくさん使われているらしいが、その絵の具が高価で絵描きが大変だったとTVで言っていた。その絵の具はウルトラマリンと言うが「ウルトラマリンは間違いでは？」と思っていたら、当時の鉱物から採ったほんまもののウルトラマリンは今の色と違って、青色が薄く渋い。そんなこんなで調べてみると絵の具にしる染料にしる今でこそどんな色でも有るようだけれど、500年前1000年前は色数も少なかったようだ。化学が発達して色の基・顔料が安く簡単にたくさん作られるようになったとか。染織をする方々からも色々な染料の天然材料を聞いた。天然材料がゆえに、手造りがゆえに同じ色同じ風合いが中々出難いらしいと言うより、一つ一つが違うから手造りなんだと開き直りましょう。絵の具も手作りする方の話は聞いた事があるし、現に顔料の粉は画材屋さんに売っている。パソコンのプリンターにも染料インクと顔料インクがある。簡単に出すには染料系の方が簡単に綺麗な色が出るそうだが、画像をいろいろ加工してじっくりプリントしたら、顔料系のほうがいいらしい。顔料の粉を買って、油や膠に混ぜればそれぞれ油絵具、日本が絵の具の出来あがりなのだ。おもしろい話を披露しましょう。

◎貝紫色は貝の粘液から作られた顔料で、BC1200年ごろフェニキア人が作り始めた。非常に手間がかかりその色で着色した織物は富と権力の象徴となり高価に取引された。

◎ウルトラマリンは宝石に近いラズベラズリから作られた。15世紀の画家ファン・アイクは高価すぎて使えなかったが、青を使った肖像画を注文されたら特別料金を要求し制作したとか。フェルメールはこの絵具を多用して借金を作ったとか。

◎コチニール色素。16世紀にスペインに依る新大陸征服から新たな顔料がヨーロッパに伝わった。カイガラムシ科の虫（エンジ虫というから赤・カーマイン）から抽出。顔料・食料・薬に使用される。虫は嫌だと添加物にコチニール色素と書いてあると敬遠する人もいるみたい。

◎インディアンイエロー。昔は、牛にマンゴの葉のみを与えその尿を集めて作られた。動物虐待に当たるらしい。オレはこの絵具はあまり使わない

◎バーミリオン・赤。水銀と硫黄の化合物で毒性があるため現在は製造されていない。オレは好きな色だ、コチニールのカーミン色にバーミリオン色を乗せると益々赤が冴えるのだ。

13-048 悪いのは誰だ 160713

先日マスメディアの解説者が面白い事を言っていた。「今の日本は新たに出てきたものを批判する文化」「今の日本は新しく出てきたものを押し倒す文化」が横行している、これは政治の話、日本の首相の話だろうと思うが、今の安倍首相は就任してもう半年にもなるのに「ヤメロ」の声は大きくは聞こえてこないのが不思議なくらい、解説者の彼がいうようにここ何年かは何人かの首相が入れ替わり立ち替わりほぼ1年単位で変っていった。新しい首相が就任して3カ月も経つと「NO」の声が出始め半年ぐらいになると「これはだめだな」とマスメディアも街のおじさんおばさんも呆れ初め、1年になるかならないで「彼の退陣は何時か」の秒読み態勢になり当然のように席が無くなり次の人と交代していった。前の首相が誰でその前の首相が誰でと名前はすらすら出てくる「彼の此処がいけない」「彼の此処が許せない」と一生懸命叫んでいた解説者の画像、新聞記事の論説がいくつか浮かぶがほとんどの内容が「いけない」「許せない」「ダメだ」というような言葉で埋め尽くされていたように思う。例えばひとつの政策で色々な角度から眺め分析をして、他の政治家、外国、以前の事と比較検討して気長に話をする、討論すると言うような記事やら解説にはなかなかお目にかからなかった。というよりお目にかかれなかっただけで、本当はたくさんあったのかもしれない、いやたくさん有ったはずだと思いたい、というよりそんな風に懇切丁寧に一つの事を「こちらはいい」「こちらはよくない」「こうすればもっといいのでは」と時間をかけて話し合った事があったと思うけれど、オレの目には止まらなかった、皆さんの目にもとまらなかった、表には出てこなかった。何故出てこないと言うよりも「そんな邪魔臭い話が聴けるものか」「そんな長ったらしい話が読めるものか」「難しい話はどうでもいいよ」「それよりもスキャンダラスな話」「失敗談をもっと聞かせろ」という大衆の要望にこたえてマスメディアの経営者は「大衆が知りたがっている事」「大衆が喜ぶ政治家の言動」「そうだ年に一度は祭りを催すように、首相の首をすげ替えて、選挙をしてみなさんに喜んでもらう」「わがマスメディアも未来永劫発展していく」なんてことになっているというようなことは無いよねえ。というより皆さん邪魔臭い、面白くないと言うような話もたまには聞きましょうね。

“自由の国”日本、日本は言論の自由の国なので「あいつはダメだ」という言葉を発してもいいけれども、軽い言葉の団体が集まって重々しくも「あいつはダメだ」の言葉が首相を潰していく。自由を日本にもたらした元祖“自由の国”アメリカではそんな事は起こっていない、勿論「ダメだ」という人もたくさんいるけれど「ダメではない、むしろそれよりよくやっている」というような言葉もたくさんあってバランスを保っているように思う。この事に関して「今の日本は新たに出てきたものを批判する文化」「今の日本は新しく出てきたものを押し倒す文化」は的を射ている話だと思う、というよりこんな風潮を主導してきたのはマスメディアだと思っている。アメリカから入ってきたもうひとつの自由経済「金を儲ける奴がえらい」「金を持っている奴がえらい」はもちろんマスメディアにも「うちは関係ない」とはいかず、世論を導いて、金を儲けるという目的のためには次から次に大衆を飽きさせない、常に興奮させると言う事で新聞もTVも話題つくりの為に首相の交代、選挙と予定を組んで紙面を作っている、番組を制作しているようだと思ってしまう。首相交代前後の何カ月もマスメディアの皆さんが競馬の出走前後のようにおおはしゃぎをしている。むかしはオレも一語一句聞き洩らすまいと一生懸命各氏の話聞いていたが、今はそんな話も夫婦喧嘩か隣同士の喧嘩裁判のようで馬鹿馬鹿しい限りだ。

夫婦喧嘩といっても我が家の事を申し上げる訳にはいきませんが、お互いに「あの時に自分はこう主張した、こう行動した、なのに相手は反対した、反対の行動をした」「なにをおぬかしか、あの時こう主張したのはこちらで、こう行動したのもこちらだ」というようなどちらがどちらともつかない水掛け論があつた時この時と延々と続く、当事者にしかわからない些細な事、二人以外の人にとってはどうでもいい事が悪意を持って延々と話し合われお互いの気持ちを

傷つけどんどん回復不可能な状態に持っていく、一人になればものよくわかった好人物の一人一人が話もできない状態になってしまう、というようなことは世間でよくあること、その反対に愚痴も非難も無くだまっていたり合っている夫婦もたくさんある。同じ暮らすのならば仲良くするのがいいと思うがそうはできないのが人の人たる所以かな。政治の話と夫婦喧嘩の話といっしょにするなど怒られそうですが、似ていませんか。夫婦である期間も、首相である期間も短すぎるといけません。

13-049 科学いろいろ 190713

桜井邦朋著<なぜ宇宙は人類をつくったのか>をぱらぱら読んで、科学の話が面白い、相変わらず中味の中核は、難しい処は珍紛漢紛でわからないけれども、この先生の言っている事は素人のオレにもわかるように専門用語、専門数式が少なく興味が湧くようなおもしろい部分を抜き書きしているのか、読みやすいし読むと楽しい、先生も若い頃には観測に、数学式に、実験に、と素人の我々にはそれこそ何が何やら皆目わからない世界（わからないのはオレだけではないと思うが）に没頭されていたのだろうけれど、年齢（よわい）80歳前になり、人と人の話、思想の話をしようとしているように読んだ。

生命が生を営む、生命活動を維持していくには、生命体の内部に存在する物質の間で起こる化学的な反応過程を働かせるために必要なエネルギー源が、周囲の環境の中に存在しなければならない。このエネルギー、究極の根源は何処にあるか、このエネルギーの起源に生命を生み出す動機が含まれているのか、このような疑問に宇宙の進化は答えなければいけない。またこのような疑問を追及できる知的な生命がどのような過程を経て創造されてきたのか、答えを見つけなければいけない。人間は知性を得た、何億年かかって地球上の生命がそれぞれ進化した中で、人間だけが知性を得た。人間だけが“宇宙における位置”について考えられる。人間は個人間にしろ国家間にしろ醜い事に関わりすぎる。

桜井先生“知性”の事も書いている。野蛮で未開と言われるような民族でも言葉を持って日常生活に使っている。現在でも南米アマゾンの密林地帯に生き様がほとんど知られていない民族が住んでいるが彼らも言葉を意思疎通の道具として使っている。“言葉という意思伝達手段を発明する”これが人（ヒト科ヒトHomo Sapiens）に先天的に備わっていたのか。人が言葉を発明してまず周囲の物に名前をつけた、記号化した、次に物から抽象的な事柄に名前をつけ記号化した、当然な事のように思考が可能になった。言葉の構造が人の思考の形式、理論の構築、文化の様式を生み出した。

以前読んだ話で間違っていたらごめんなさいだけれど、宇宙に物質があって、反物質があって、その二つが衝突をすると、普通は物資と反物質が衝突をすると全てが消えてしまうらしいが、物質と反物質が同じではない、物質と反物質は対称ではないので、その対象でない部分、細かい部分が衝突で爆発炎上にもかかわらず焼け残る。その焼け残った物がそれらの多くが星を創り、太陽を創り、地球を創り、生命を創り、人間を創り、オレを創った、と理解している。つまりオレは、何時の時かは知らないけれど、何処の空間かは知らないけれど、何処かで何かがつぶつて消えてしまった物の中の“燃えカス”“アマリモン”これがオレなのだ考えると、気持ちが安らかに大きくなる、嬉しくなる、楽しくなる。

先日も当ブログ<13-042 神>に書いた、小林照之著<取材ノート>で田中一村の話が載っていた。小林照之著<神を描いた男・田中一村>の取材ノートで、ハブの取材で奄美に行った折、無名の田中一村の絵を見て注目し資料を集め、当時“健やかに住む事が困難な僻地、文化果つる島”に永住した画家、“ノロ”世襲制で継がれていく女性だけの神職“ユタ”神の霊に触れ、神の心境を語り、宣託、祈禱、運勢判断、病氣治癒をする人の存在を無視できないという、画家はこれらの人たちに近付き、神や精霊を見たのでは。小林は画家田中一村の絵を「神に導かれて奄美にやってきた、自然という神を描き、奄美の自然に抱かれて没した、と語っている。

友人のきぬちゃんが毎年和歌山の大峰奥駆け修行をしているが、「今年の奥駆け修行者に、謙虚で精霊を感じる事ができるすがすがしい30歳の若者が参加した」と喜んでいる。

神や精霊の話聞き、オレの中にも、オレの周りにもオレなりの精霊、オレの魂、オレの神が在る、それを感じてみようと思うようになってきた。それこそ宇宙の中のオレだから。

13-050 古墳から出た刀剣 240713

NHKの歴史番組を見た。埼玉県古墳から発掘された刀剣に百余文字の象嵌文字が発見された事、後日その刀剣を現代の職人たちが復元したという話だった。この古墳が造られた5世紀はまだ謎の部分が多い時代らしく、この百余文字からいろんな事が読み取られ当時の謎のいくつかが解明されたい。「獲加多支齒」という文字が読み取られ、九州から出た同じような刀剣の中に「獲〇〇〇齒」の文字がみられ判読不明の中の3文字がこれだとわかったそうだ。「獲加多支齒」とは<ワカタケル大王・雄略天皇>の事だそうだ。番組の中で大王<ダイオウ>と発音された言葉が飛び交い「日本でもダイオウと発音していたのか、それでいいのか、それとも何かがあるのか」と不思議に思った、というのは歴史を習った若い頃から<ダイオウ>という言葉は聞かなかった、ヨーロッパの言葉だと思っていた。天皇があり、大和政権がありそれ以後は習った、大和政権以前には明日香時代があり臍げに天皇が居たのでは、ぐらいに思っていた。卑弥呼が天皇家とどう関係があるのかは知らないがそれ以前はあやふやだ。あやふやだけれども天皇陵はいくつもある、実在した人物かどうかはわからない天皇も多いらしい。大王という言葉は今まで<オオキミ>という音が正解と思っていた、オレが住んでいる隣の町に「これが本当の継体天皇陵」(宮内庁が管理している継体天皇陵の近く)が在り、学者先生たちの考えとしてはこれが継体天皇陵に間違いのないようになってきている古墳があり、そこが最近発掘されたいおうの杜・今城塚古墳>と表記され公園になっている。「何でこの公園では<ケイタイダイオウ>なのか、継体天皇陵と言わないのか」と何人かに聞いたが答えは無かった。

今回の歴史番組は刀剣に掘られた百余文字の解明の話、その刀剣を現代の職人たちが復元してみるという試みの話だったが、復元には極興味があるがまずは文字の話。学者先生の話では5世紀は解からないところが多い古墳の最盛期、4世紀は卑弥呼の時代、6世紀は聖徳太子の時代とよく知られている間に挟まれたなぞの多い時代、中国・宗の文献、こうして残された文字、古事記・日本書紀でしか解明されないとか。埼玉県古墳から出土した刀剣の錆を落として綺麗にして文字を見つけその文字を読むという気の長い作業があったらしい。ぼろぼろに赤錆びた鉄クズのような塊の表面を少しずつナイフで削り取り剥がしていく、綺麗になって字が読めるようになった時は大感激したのだろうと想像される。「私たちが現場で発掘されて見る鉄は錆びて赤茶色、銅も錆びて緑色、共にボロボロ、元々は棺に入れられた当初はこんなに綺麗なものが、ピカピカの新品、手の込んだ立派なものが収まっていたのかと感慨深い」と復元された刀剣を見て先生述べた。百余文字は漢字の羅列で人の名前がたくさん在るのがわかった。ワカタケル大王<獲加多支齒-あっているかな>と墓の主ヲワケ王の名前が載っていた。先生の解説に依るとワカタケル大王とは雄略天皇の事で、ヲワケ王は埼玉古墳の在った周辺の有力豪族だったのだろうと推測されるそうだ。雄略天皇は実在が確認された最初の天皇だと先生たち、それまでの天皇の名前は古事記・日本書紀に名前は出てくるが実在がわからないという話だった。今回の刀剣と同じような物が九州でも発掘され、5世紀当時大和政権を中心に関東も九州も征服とまではいかないまでも緩やかな支配関係に依る交流があったと推測されると先生。コンビニの数より多い大小の古墳が日本国中にあるそうで、コツコツ調べるうちに当時の事がもっとわかってくる。当時は水を利用して船で人も物も東北、九州、朝鮮、中国と繋がっていたようだ。新しい技術、違った考え、違った習慣を持った外国人が日本中のあちこちに居た、また日本人も朝鮮、中国に渡っていった、そんな時代だったそうだ。

象嵌という言葉は若い頃から知っている、そりゃあ美術品の事ですから知ってまいすよ、とオレは知ったかぶり。知らない人の為に説明します、鉄やら木やらの表面を掘って別の材料を嵌めこみ絵や図案を創る技法、木の板の表面を

削って色の違う木を埋め込んだ図柄、模様を見た事があるでしょう、あれですよ。今回の刀剣は日本刀を創る作業、白装束の刀鍛冶が火を燃やして鉄を焼く、ハンマーで叩く、また焼きまた叩く。ほぼ刀剣の形が出来あがったら1センチぐらいの大きさの漢字を鑿（たがね）でコツコツ掘っていく、その掘った溝に針金状の金を金槌で埋め込んでいく。「今の時代はより早く合理的に仕事を進めるが、当時はゆっくり時間をかけ、持てる技術を最大限に活用して、いいものを、美しいものを創っていたようです」刀剣の復元が終わって、その仕事に携わった人たちの弁。

13-051 だいおうの杜 260713

前回、当ブログ<だいおうの杜>の事があまりに気になって思い切って隣町、高槻市・今城塚古墳を見に行くことにした。「また今度と逡巡していると何時になる事やら、思い立ったが吉日だ」ではないけれど早速行こうと決め、ペットボトルにスポーツドリンクを詰めカメラと小銭入れを持って自転車に飛び乗った。

博物館の説明にも出ていたが、オレの住んでいるこの辺りの山の麓、淀川右岸島本町、高槻市、茨木市辺りには大小古墳がたくさん点在しているらしい。ほとんどが山に近い処というのはこの辺り古墳の時代は海が真近なので、島、浜という字が付く地名もたくさんある。安威川を遡って山に近付き宮内庁管理の継体天皇陵の傍を通過して目的の山城塚古墳へ行こうと走り出したが、いつもの事、オレの悪い癖、右へ左へクネクネ曲がって行き止まりの細い道に何度かであい富田の交差点にやってきた、あとはこれを北に向かって右側に目的地が在るはずと自転車を進ませる。

あれだと思われる公園が見えてきた。整備されたカラー舗装遊歩道の向こう、こんもりした小山に木が生い茂っている、その向こうに赤っぽい土で焼かれた人と同じぐらいの大きさの円筒埴輪の列が連なっている。せっかくだからと古墳本体の小山に登った。昔は田圃の真ん中に小山が在り、村の人たちが墓稜だとは知っていてもその小山を散策し、子どもは遊び場に1000年1500年と時が経ったのだろう。

博物館は無料、フラッシュを焚かないのなら撮影も可、暑い中走ってきたので冷房が利き気持ちがいい、ボランティアの案内人も居る、ただボランティアの方に<だいおう>の話は通じなかった。埴輪は小さい人ぐらいの大きさの円筒、兵士、力士、女性像、子ども、牛、豚、鶏、家の形、室内にあるとなかなかの迫力と大きさだ。この地域たくさんの古墳が長い期間作り続けられたので、埴輪を焼く専門の場所が在ったようで、窯の残骸も飾ってあった。人や動物の形が面白い、欲をいえばもっと躍動的ならオレは感激なのだが。次の部屋にはデカイ石棺が3基も在る、わざわざ九州、近畿等の石の産地で最近作らせたそうで、九州の石はピンク色でなかなか艶っぽい、去年中百舌鳥博物館でも石棺を見たが、みんなトラックぐらいの大きさだ。石棺の内部は呪いの意味や防腐剤として水銀の赤が塗られていたようだ。

素晴らしいのがケイタイダイオウ着用の復元鎧、なかなかお洒落、今でもファッションショーにアレンジすれば使えそう、ただ驚くのは古墳時代の古代人は身体がデカイのでは、オレよりもだいぶ大きいかも、靴もオレのものよりだいぶデカイかも。

去年友人の押海君の処を訪れた帰途に仁徳天皇陵を見に行った。世界一の大きさを誇るその古墳は宮内庁の管轄で前方から見ることしかできずその大きさはそこからではわからないが、いくつもの航空写真を見てそっぴているぞというぐらいに有名だ。勿論“墓稜が在る”それが“仁徳天皇陵”と言われているので今まで疑いもしなかったが、もしやとネットで調べてみた。平城京時代の天皇は多分実在したようで、その前の飛鳥時代も天皇という呼称で呼ばれていたかいなかったかは不確かだけれど実在したようだ。それ以前の古墳時代はどうもわからないらしい、古事記・日本書紀それと少しの中国の記事だけが頼りで古代史を語っているようだ。そこで思い出したが小林秀夫著<本居宣長>の中で、古事記は天皇家の為に書かれた書物、天皇家がいかにして起こったか、天皇家がいかに日本をリードしてきたか、天皇家をいかに敬うべきか、というような事が書かれた書物なので、歴史書ではないと言うように読んだのを思い出した。オレは戦争以後の教育を受けたにもかかわらず「いい加減な事を教えられてきたようだ」と頭の中のものもやが晴れてきた。結論としては、仁徳も含めて古墳時代のそれ以前の天皇はいなかった可能性が高い、また実在

した人物だとしても天皇という呼称ではなくて龍力な豪族の一人、たくさんの豪族の中から抜きでた豪族が天下を取って天皇になったかもしれない、その豪族が天皇と名乗りそれが続いたのだろう。ではなぜ豪族を王と呼ぶのかくゴウゾク>ではなくて<オウ>なのか、この事はまだオレの中で謎のまま、次回学芸員を掴まえて聞かねば。亡くなった阪口さんが北アルプスの帰りの車中で「白馬岳（しろうま）の名前の由来は、雪解け時、苗代を耕す馬の形が現れるのでシロウマと名づけたのに、JRは駅名を<はくば>と変えた、白馬（はくば）に跨った王子様を連想した方が客が喜ぶだろうと変えた、勝手な事をする、何で古来から在るものを無視する」と怒っていた。ダイオウもそれと同じことなのか、それとも太古の昔からダイオウはあったのか、誰か教えて下さい。

13-052 祭り 300713

今日は夏祭りの櫓を建てる日、もう十余年この作業に関わってきた地域の小学校での夏祭り、何も無いグラウンドに鉄パイプを組んで盆踊りの櫓を建てる作業をする、42に回目という事は42年やっているという事らしい。十余年前に比べると知っている人たちはそれぞれに年を重ね60歳代、70歳代の熟年老人となったが気持ちと発言は若々しい。重い荷を担ぎ高い処に登り、ヤイヤイワアワアの無料奉仕、ボランティア作業は「オイラがやらねば」「わたしでなきゃ」と高揚した精神が夏の暑さを感じさせないのかも。出席簿に印を付け軍手とタオルを受け取り大将のおっさんの挨拶、注意喚起で始まった。思い出すのが40歳代当時のオレ大手ゼネコン・鹿島建設の現場で天井画を描いた時、8:00時に現場集合、現場所長の挨拶、ラジオ体操、主任の行程説明と注意喚起、最後に「ゴアンゼンニ」と呪文のような言葉、一歩間違えば事故に繋がる建築現場では何世紀も言い伝えられてきた言葉かもしれない。ヘルメット・安全ベルトを着用して1ヶ月ぐらい通った。余談だけれどヘルメットは被り続けると汗が出て蒸れ半日もすると異様に臭かったので何回か水道にずぶりと浸けていたのを思い出す。

町内の熊ちゃん八ちゃんの労働奉仕は命令系統がいわゆる“一筋縄ではいかない”の言葉どおり永年作業を続けてきたおっさん連がまちまちに船頭となって「あれはこう」「これはああ」と怒声が交錯する、聞いているオレは右往左往と迷うが、パイプは徐々に組み上がっていく、出来あがっていく、汗水たらす現場の若々しいオジン共である。先のゼネコンの現場では鳶職（昔は土方といっしょにしていたが）と呼ばれるおっさん集団が花型の感が在り、疲れを知らない頑丈な肉体で重い荷を担ぎ、するすると鉄棒に登り、細い鉄骨の上をホイホイ歩いている、無言の作業をこなしていた。地下足袋に乗馬ズボンとか、ニッカポッカに印半纏が力強い。

鉄パイプを起こし足に車をつける、右と左をクロスした金具で固定する、鉄の天場板を担ぎあげて床を作る、2段目を積んでいく同じように右と左をクロスした金具で固定する、また同じように鉄の天場板を担ぎあげて床を作る、2段も積みめ我々素人はフーフーの態、3段目に上がれば下半身がスルリと走る気持ちの悪さ、本職の鳶は5段10段とどんどん積み上げていくのを想像すると改めてスゴイと称赞。何処にでも有る日本の風景盆踊りの櫓、紅白の布を鉄パイプに壁に飾りたて4,5日後には正にほんまものの“お祭り騒ぎ”だ。

今日の作業が辛くなるからと酒は控えるぞと宣言しながら久々の仲間との合流嬉しくなってテンションが上がっていささか飲んでしまった。橋本船長主催の“ヨットと花火とバーベキューの会”昼過ぎに阪神西宮駅に着いた時には空は曇ってきた、朝の天気予報で午後は「にわか雨、処によっては激しい雨に雷があります」と言っていたのが現実になりつつあるのか、船の上で雨に降られたら嫌だなあと思いつつバス停辺りをうろついていると、友人佃君を発見して話していると続いて二人の友人とも合流して4人でバスの乗客となりヨットハーバーに向かった。前もって13:38発のバスに乗るのにはとパソコンで検索開始、出発地点を阪急茨木市駅、到着地点を阪神西宮駅、バスの出発時間の10分前の日時を到着時間にして検索ボタンを押した。「え！」という結果が出た、こういう検索を何度かして、何度も驚かされてきたが、今回の解答も「よくもまあ、こんな答えを、でも面白そう、今津線は今回で二度目か、よしこれで行ってみよう」と心踊らされたとは少々大袈裟、普通は阪急茨木市駅（JRは茨木駅という）から梅田に出て阪神梅田駅まで歩き阪神西宮駅に行くのが常識な行き方と思われるが、阪急茨木市駅から十三駅、西宮北口駅、今津駅、そ

ここで阪神電車に乗り換え阪神西宮駅着だった。パソコンの路線検索はいつも驚かされるが、なるほどこんな手もあったのか、古い頃からこの路線の存在、こんな電車が在ることは知っていたが、全く使わなかった、今回のこれは乗り換えが多いが値が安い、歩く距離が短いというような正解も多い。

2時間ぐらいヨットで大阪湾を航行、港に帰るといつものように地上部隊が食事の用意をしてくれている、ビールを飲んで旨いものを食って、花火を見てと盛りだくさんの時間だった。2,3時か乗せてもらって浜風に吹かれるのもいい、あの黒い雲も何処かに行ってしまう贅沢なクルージングの時間、しかもビールを飲みながらでした。今年の山は双六岳を予定しているが楽しみだ。海と違って山は自分の足で行けども行けども行きつかない遠さ大きさがオレには性に合っているのだろう。